

〔巻頭言〕

## 総合研究と脱領域の可能性

浄土真宗本願寺派総合研究所副所長

寺 本 知 正

今回の『浄土真宗総合研究』第十七号では、共通テーマを「脱領域の可能性―学際的研究―」とした。学際性とは、複数の学問領域間にもたらされる相互作用のことである。本願寺派総合研究所では、歴史学、仏教学、真宗学をはじめ、社会課題対応や調査研究に資する心理学や社会学などのさまざまな学問領域に学び、研究作業を行っている。

ところで、通常、学問では、できうる限りの主体の排除ということ、すなわち、現時点で妥当と見なしうる客観性に基づくことが求められる。宗教に関する学問でも、それは当然のこととして必要なことであり、特に歴史学・文献学にかかるものは、厳密性が求められる。その領域で研究作業する者が、その宗教に信仰を持つ主体か否かは無関係でなければならない。しかしながら、神学／教学という学問では、そうして一旦は客観性を担保したものに、ふたたび主体を関与させていき、真理性と主体性の体系的提示を試みていく。このことは、神学／教学に他の学問からは例外となる特権を付与する原論として考えられたことではなく、神学／教学の、その成立の歴史的過程から今に継続される立場と方法である。そして、客観性を立場とする学問への主体の関与のさせ方により、さまざま

まに神学／教学の方法論が議論されてきている。

特に、当研究所は、浄土真宗本願寺派という教団に付置する研究所であり、浄土真宗の信仰を持つ主体、本願寺派の個々の寺院や教団全体にとって、「こうあるべきである」という規範性を立場とする研究も行ってきている。その意味では、当研究所で行われる研究作業は、これまでも領域を超える作業としての萌芽をはらんできたといえるだろう。

今回、あらためて当研究所の紀要の共通テーマを脱領域の可能性としたことには、教団に付置する研究所の研究作業とは、「救済論」を中心とする教義学の方法論に基づく作業だけに必ずしも限られるものではなく、儀礼論や教団論、伝道論をはじめとした教学の各領域、そしてそれらに隣接する各学問領域との相互の連関をすすめてこそ、教学という体系化された学問が構築されるということを再確認する意味もある。浄土真宗の信仰主体を有するものにとつて、それぞれが直面する問題を分析・解釈、そして対応していくにあたって、今回の紀要は有益なものとなるであろう。

また、当研究所の研究員たちは、他分野の研究分野においても十分な実績となり得るだけの研究を作業しており、浄土真宗の信仰主体を有しないものにとつても、参照していただけるものと思う。

ご一読いただければ幸いである。